

# 2022年度 修士学位請求論文要旨

インターネットは在日中国人留学生に  
どのような影響を与えているか  
——言語使用、人間関係とストレス対応に着目して——

国際日本学研究科 国際日本学専攻  
多文化共生・異文化間教育研究領域  
4911213002 聶 心儀

本研究の第1章では本研究の背景と目的について述べた。近年、日本における外国人留学生の数は「留学生30万人計画」によって飛躍的に増加している。独立行政法人日本学生支援機構の統計によれば令和3年における外国人留学生は242,444人にのぼる。その中で、中国人留学生が最も多くの人数を占めていた。また、日本に限らず、世界における留学生数が増加し、留学は大衆化しつつある。

留学生は長期間母国を離れて今まで接触したことのなかった文化の中で生活していかなければならない。しかし、2010年からのインターネットの発達により、留学生はインターネットを通して、いつでも母国にいる家族や友人と連絡を取ることができるようになり、SNSを通じて母国の情報を収集することもできる。そこで、いつでもインターネットを使用することができる留学生は、海外にいながらも「自文化のバブル」に包まれた状態にいることが可能となった。つまり、インターネットの普及は留学生に大きな影響を与えている可能性がある。

そこで、本研究の目的は、インターネットの利用がどのような影響を与えているかについて具体的に調べることである。

第2章では上記の目的のために、先行研究を整理した。先行研究によって、本研究で特に注目すべき視点として、留学生の言語使用、人間関係、ストレス対応の3つの視点が明らかになった。そこで、この視点から、インターネット普及前と普及後の先行研究の整理を行った。

まず言語使用においてインターネット普及に関わらず、学校のような公的領域での対面状況では日本人との接触が多く、日本語の使用割合が高いことが明らかになった。一方、私的領域では、母国の人と関わるが多く、使用する言語も母国語がほとんどであることがわかった。また、対面状況ではない場合には、インターネット普及後は母国語への利用度が飛躍的に増加したことがわかった。

次に人間関係においてインターネット普及後からは留学生は中国人同士との付き合いが顕著となり、頻繁に家族と連絡を行っていることから家族の存在も大きくなっていることが明らかになった。さらに、日本人と友人になるには自ら働きかけるというハードルがあるのに加えて、中国人と友達になる便利さが故に日本人との交友が消極的になることが指摘されていた。

最後にストレス対応についての先行研究をみると、インターネット普及初期の研究が多く、その段階では中国人との交流に依存しているが、月に数回のみ連絡であり、依存頻度は高くなく、インターネットによる影響はそれほど見受けられなかった。

第3章の研究方法では、調査対象、調査方法、分析方法について述べた。留学生を対象とした調査では漢字圏と非漢字圏、アジアと西洋等大きな違いがあり、一定程度の条件の統制が必要となる。また、筆者自身も中国人留学生であり、被調査者と中国語を用いてインタビューを行う方が日本語力に左右されずに自由に話せるため、本研究では研究対象を文系の学部中国人留学生の2人に絞った。調査方法として半構造化インタビューを用いた。インタビューの中で特に言語使用、人間関係、ストレス対応に着目して調査を行い、中国人留学生の生活からインターネットによる影響を検討した。分析方法として川喜田二郎によるKJ法を用いて、2人の被調査者がどのような留学生活を送っているのか、それらがインターネットの使用とどのように関係しているのかについて分析した。

第4章と第5章では中国人留学生2名のインタビューを用いた分析を述べて、更に考察を行った。本研究ではインターネットは中国人留学生に2つの大きな影響を与えていることを明らかにした。

まず、一人目のインタビューからは、インターネットによって留学がより簡単かつ楽なものになったことで、なんとか留学を続けることができている実態が分かった。交流に対して積極的ではないタイプの人間はインターネットがなくなることによって、周りの友人が制限され、一人ぼっちの辛い留学生活になる可能性があるが、それはインターネットによってかなり緩和されていた。インターネットにより簡単に中国の友人と連絡ができるため、無理やり日本の社会に溶け込む必要がなくなり、寂しい留学生活からも逃げられた。インターネットが中国と繋がるベースラインを作ってくれたおかげで、なんとか留学というものを生きることができ、留学生活はより「楽」なものとなっていた。

二人目のインタビューは、対面の交流が苦手ではないので、日本人との交流も含めて一定程度満足する留学を継続できているケースであった。ここでは、インターネットによってこの留学生は世界中にいる中国人とのやり取りを楽しむことができていたが、そのために、「まずまず」の留学生活に留まっている可能性が見えてきた。インターネットによって世界中と繋がりを持つことができたが、その交流の相手は中国人であり、中国の文化に浸っていた。このことが、日本の文化にさらに深く浸り、日本のことをもっと知り、日本人ともっと深いつながりを作ることを結果的に阻害していた可能性がある。

結果をまとめると、インターネットによって母国文化を持って留学することができたため、彼らの留学がより楽なものになって、留学生活のハードルを下げたことは、留学の大衆化に大きく貢献したと言えるのではないかと本研究から指摘できる。一方、母国文化を持って来たことによって日本の文化に溶け込むことに対して積極的になれなかったことがインターネットによる負の影響ではないかとも指摘できる。先行研究において、中国人留学生の留学大衆化は大きく高等教育の大衆化による就職の困難と、中国における高度経済成長の2つの要因が述べられているが、本研究では留学の大衆化についてインターネットによる影響が少なくないと指摘できた。

最後に、第6章では今後の課題について述べた。本研究は2人の中国人留学生を対象に研究を行ったが、これだけでは包括的なものではない。個人によって更に別の影響も見られる可能性がある。また、この研究では言語の使用、人間関係、ストレス対応の3つの視点から焦点を当てたが、留学生の研究において様々な視点があるため他の視点から研究を行う必要もあると考える。現在は中国人留学生に限らず、ベトナム、ネパール、韓国やインドネシアからの留学生も多く日本に滞在しているため、今後彼らに焦点を当てた研究も行われれば、中国人留学生とはまた別の結果も見だされる可能性があるだろう。